京都大学の講義科目「自己形成の心理学」のAL型授業
ープレポスト調査の変化からー

溝上　慎一
（京都大学高等教育研究開発推進センター/教育学研究科）

科目概要：　2017年前期、京都大学全学共通科目「自己形成の心理学」（講義科目）
受講者47名（1年生37名、2年生4名、3年生2名、4年生4名、心理学のコースがある教育学部、文学部、総合人間学部の学生が多い）
内容：　発達（青年）心理学、パーソナリティ心理学を中心とした心理学の応用科目

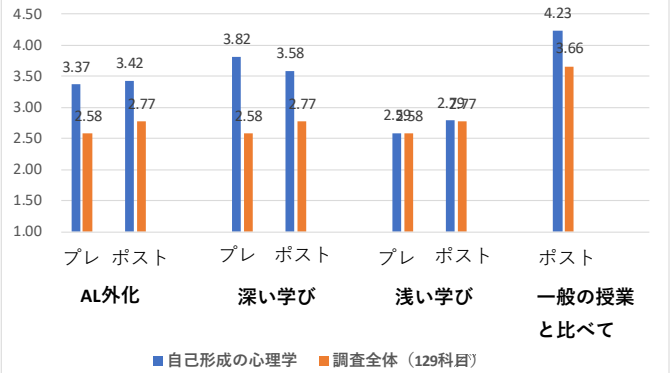
問題

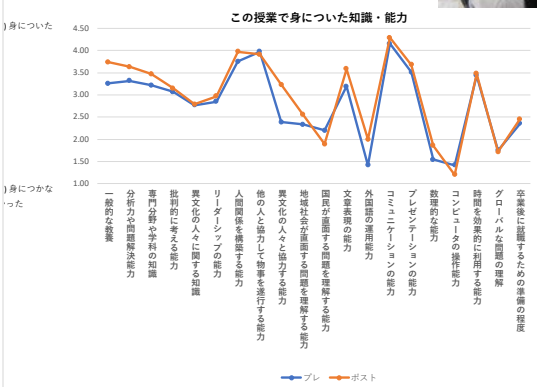
この授業は2008年度より開講している講義科目におけるアクティブラーニング（AL）型授業である。いわゆる一般教養教育の授業であり、全学部から学生が受講するが、概念や理論の習得に力点が置かれる。他方で、概念や理論を、他の心理学の授業や本等で学んだ既有知識、個人の経験や日常生活と繋げて深く学ぶことを学習目標としており、ここでALとしての個人・ペア・グループワーク、前に出てきて発表などが授業デザインとして構造化されている。

2015年までは220人定員の講義室で、どこまで講義科目でのAL型授業を実現できるかに取り組んできたが、2016年度より50-60人に定員を減らし、心理学の準専門科目としてどれだけ深く教授学習をおこなえるかに取り組んでいる。当日紹介する授業は、2017年度前期におこなった直近のものである。ワークシートを用いての「個ー協働ー個の学習プロセス」を基本としてAL型授業がデザインされている。自己形成論は抽象的・体系的な概説になりやすいので、途中粘土細工を通した自己表現も入れている（写真）。一種の投影法の作業で、この場合でも作品を仕上げた後は、自身の作品について言語を用いた外化、前に出てきて発表をおこなっている。

結果と考察

200人規模の授業と違って、一人ひとりの学生の学習や集中度、関心・態度に注意を払いながら授業をおこなえたという印象をもっている。プレ（授業開始3週目）・ポスト（最終週）の比較を見ると、ポストで若干浅い学習が高くなって深い学習が低くなっているなどの特徴はあるが、3週目ですでにこのプロジェクトの全国平均より圧倒的に高く、この変化はとくに問題ないと考えている。AL外化、資質・能力の得点はおおむね肯定的に変化している。「批判的に考える力」がもう少し高くなるようにするのが今後の課題である。成績（素得点）とこれらの変数との相関を調べたが、相関がみられず（ポスト変数の場合、AL外化とr=.037）、深い学びにおいては負の相関を示した（r=－.116）。これも今後の課題である。





本研究は，大学教育学会からの課題研究助成（H27～H29）「アクティブラーニングの効果検証」（代表者：溝上慎一），科学研究費基盤研究（B）（一般）（H28-H30）「学習成果に結実するアクティブラーニング型授業のプロセスと構造の実証的検討と理論化」（溝上慎一（代表）：課題番号16H03075）の助成を受けておこなわれている.